



こしき しま

甌島で暮らす。

鹿児島県 甌島移住ガイドブック



東シナ海に浮かぶこししま甌島列島。

自然豊かな環境と共に暮らす日常がここにはあります。

集落を歩けば季節の移ろいを感じ、どこか懐かしい風景に心が和む。

都会のような便利さや、観光地のようなキラキラとした眩しさはありません。

だけど、どっしりと根を張るアコウの木のように、

落ち着いて大切なものと向き合える場所です。

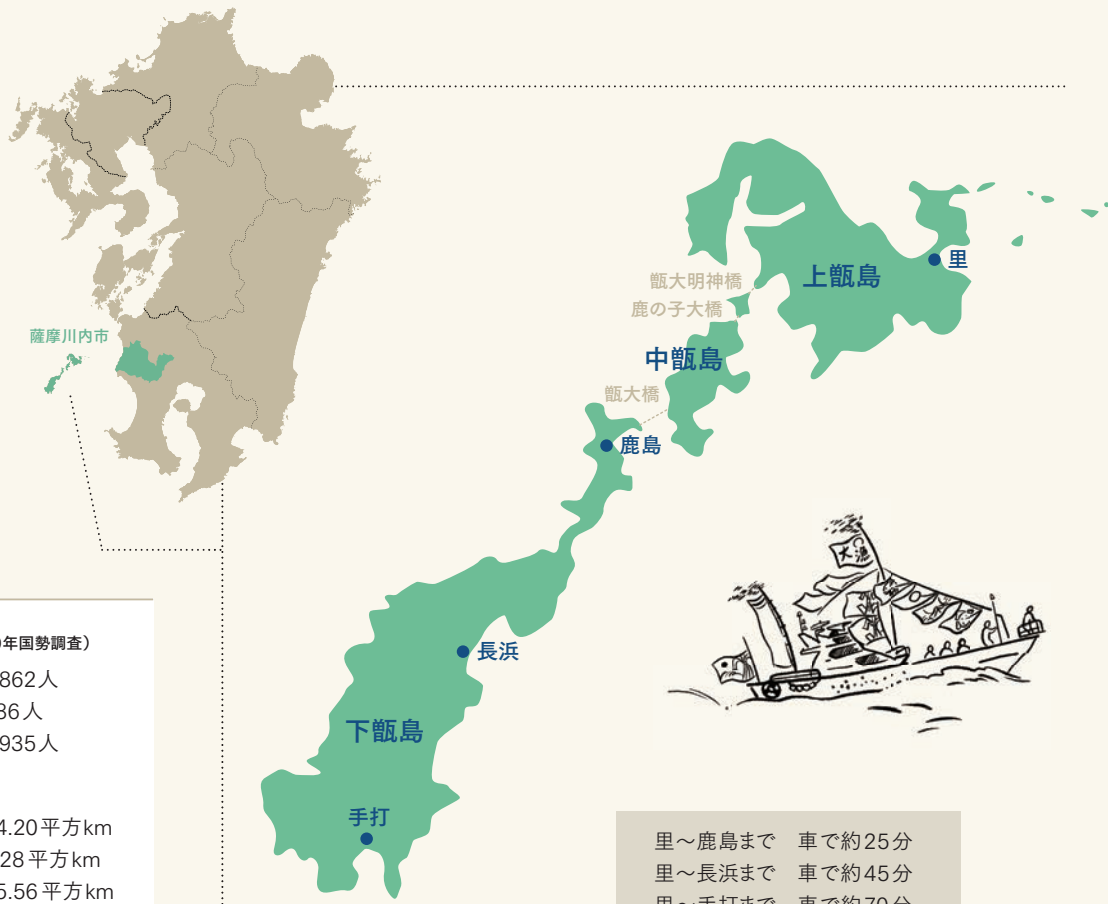
ないものではなく、ここにあるものと生きる。甌島で暮らしてみませんか。



目次

- | | | | | |
|----|----------------------------|----|-------------|------------------|
| 4 | 甌島の基本 | 14 | INFORMATION | 住む |
| 8 | お試し移住してみました! | 15 | INFORMATION | 生活する |
| 10 | 移住の先輩に聞く
甌島での暮らし、どうですか? | 16 | INFORMATION | 働く |
| 13 | 甌島のここが好き! | 17 | INFORMATION | 育てる |
| | | 18 | INFORMATION | 医療・福祉 |
| | | 19 | | さあ、甌島で暮らしてみませんか? |

甑島の基本



DATA	
人口 (2020年国勢調査)	
上甑島	1,862人
中甑島	186人
下甑島	1,935人
面積	
上甑島	44.20平方km
中甑島	7.28平方km
下甑島	65.56平方km

鹿児島本土から西へ約30km。薩摩川内市に属する甑島列島は、上甑島、中甑島、下甑島と縦に連なる3つの島で構成されています。その全長は約35km。2020年に甑大橋が開通し、列島間を陸路で気軽に行き来できるようになりました。本土からは高速船で最短50分とアクセスしやすく、鹿児島では数少ない、本土と日帰りで往来できる離島です。

主要産業は水産業で、ブリやキビナゴ漁が盛ん。

風光明媚な景観は国定公園にも指定されており、古くは8000万年前の地層から形成された断崖や巨岩など、ほかでは見られないダイナミックな自然が魅力です。

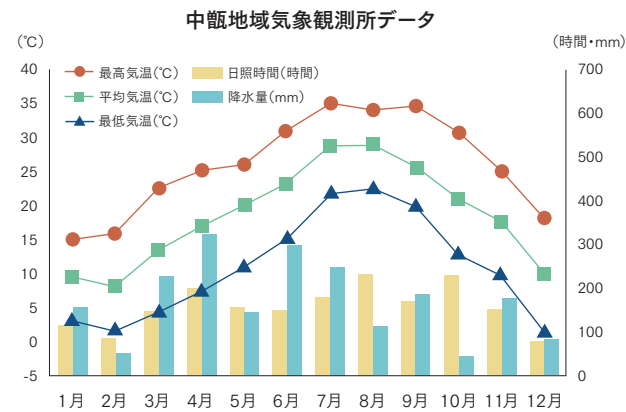
島内には里、上甑、鹿島、下甑の4つの地域があり、その中に小さな地区・集落があります。現在は道路が整備され陸路で往来できますが、かつては移手段が船に限られていた集落も。そのためエリアごとの特色が強く、同じ甑島の中でも大きく印象が異なります。

里～鹿島まで 車で約25分
 里～長浜まで 車で約45分
 里～手打まで 車で約70分

気候

薩摩川内市全体の年間平均気温は18.6℃。甑島の気温は本土と比べると年間通して温暖ですが、海からの風で体感温度は低く感じます。“鹿児島島の島”と聞くと、常夏のイメージがあるかもしれませんが、冬は防寒着や暖房器具が欠かせません。また年間通して降水量が多く、夏から秋にかけては毎年多くの台風が接近します。

資料：鹿児島地方気象台（2022年）



上甑島・中甑島



低くならかな山なみが女性的とも表現される上甑島。中甑島は上甑島と橋でつながっているため、すぐに行き来することができます。

上甑島の北東部にあるのが、甑島列島で人口が最も多い里地域です。また上甑島と中甑島にまたがって上甑地域があります。上甑地域はいずれも小さな集落なので、それぞれ独特の文化や言葉などが強く残っています。一方で日用品を買いなお店がない集落もあり、車がないと生活が不便に感じられるかもしれません。

主な地区と集落

里地区 1,007人
 港があり甑島列島で一番人口が多い。武家屋敷通りの玉石垣がシンボル。商店や郵便局、ATM、コインランドリー、飲食店などが集まり便利。移住者が多いのも特徴。

上甑地区
中甑集落 377人
 銀行や官公庁など様々な公共施設やスーパー、学校などが集まる上甑島の中心地。

平良集落 189人
 中甑島唯一の集落。平良漁港を中心に形成された小さな港町。細い路地と平屋の集落群が特徴的。

下甑島



荒々しく険しい山なみや断崖が男性的な印象がある下甑島。北部には鹿島地域が、南部には下甑地域があります。人口の多い集落は、本土に近い東側に集中。海からの強い風が吹きつける西側のエリアは、迫力ある断崖や険しい山が続き、その狭間に小さな集落がポツポツと存在します。

主な地区と集落

鹿島地区 331人
 恐竜の化石が発掘されたことで注目される。甑島列島の中心部分に位置しており、北にも南にも移動しやすい。

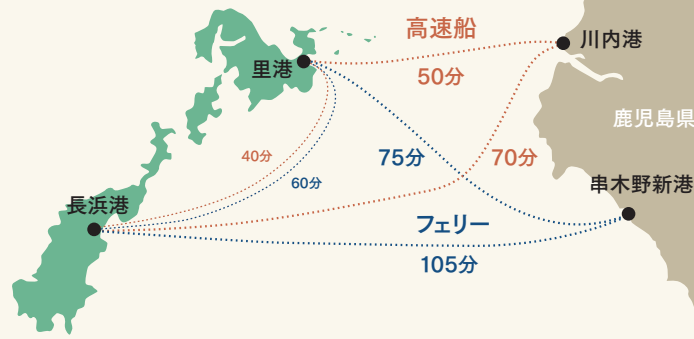
長浜地区 599人
 下甑島の中で一番人口が多い。港があり、昔から様々な人を受け入れてきた開放的な気質が漂う。航空自衛隊の分屯基地もある。

手打地区 563人
 かつては薩摩藩の貿易の拠点だったことから武家屋敷跡には美しい石垣が残る。『釣りバカ日誌』や『Dr.コトー診療所』など様々な作品の舞台やモデルにもなっている。

瀬々野浦地区 75人
 甑島を代表する観光スポット「ナポレオン岩」をはじめ、巨大な岩や山などに囲まれた秘境感の強いエリア。

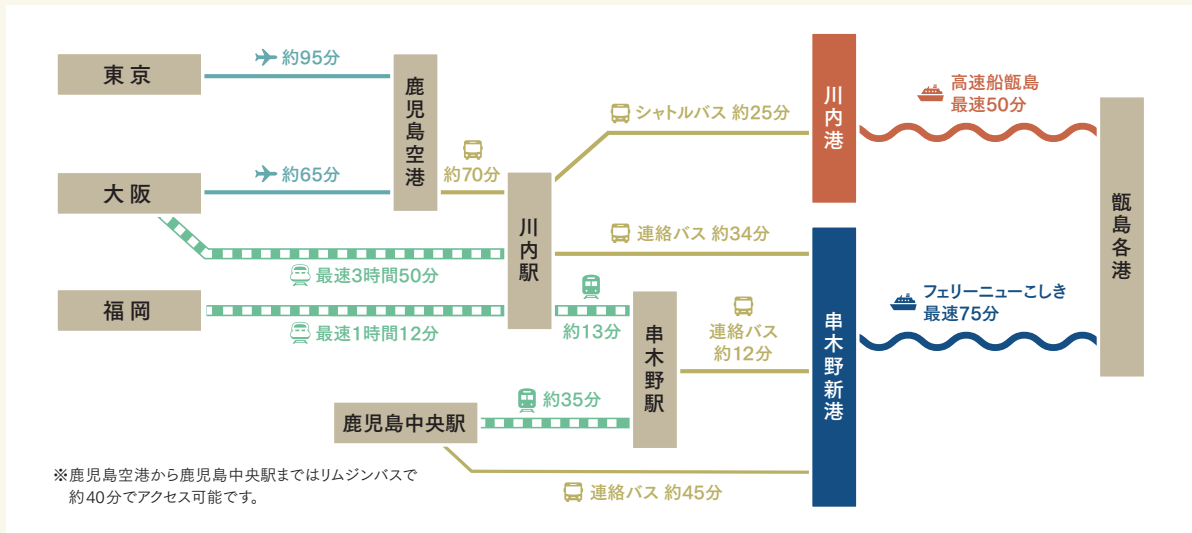
交通

本土と甑島との往来には、川内港からの高速船（1日2便）または串木野新港からのフェリー（1日2便）を利用します。いずれも島民の場合は、割引運賃が適用されます。



高速船甑島

フェリーニューこしき



※鹿児島空港から鹿児島中央駅まではリムジンバスで約40分でアクセス可能です。

高速船甑島

運賃

	大人	小人	甑島住民割引	
			大人	小人
川内港～甑島各港	3,440円	1,730円	2,270円	1,140円
里港～長浜港	2,420円	1,220円	1,490円	750円

運航時刻表

	1便		2便	
	下り	上り	下り	上り
川内港	8:50 発	11:40 着	14:30 発	17:20 着
里港	9:40 着 9:45 発			16:30 発 16:25 着
長浜港	10:25 着	10:30 発	15:40 着	15:45 発

フェリーニューこしき

運賃

	大人	小人	甑島住民割引	
			大人	小人
串木野新港～甑島各港	2,340円	1,170円	1,580円	790円
里港～長浜港	1,500円	750円	860円	430円

運航時刻表

	1便		2便	
	上り	下り	上り	下り
串木野新港	10:20 着	11:15 発	16:05 着	16:30 発
里港	9:05 発 8:45 着	12:30 着 12:50 発		17:45 着 17:50 発
長浜港	7:45 発	13:50 着	14:20 発	18:50 着

※運賃は消費税込の金額です。
 ※甑島住民は甑島発の往復切符を購入するとさらに割引が適用されます。
 ※高速船・フェリーともに例年1～3月中に定期検査に伴う運休期間があります。
 ※高速船はGW、お盆などには臨時(増)便が出る場合があります。

上記ダイヤは2023年4月1日から適用されます。
 2～3月は改訂前のダイヤで運行いたします。詳細につきましては、
 甑島商船(0996-32-6458)にお問い合わせください。



甑島商船



お試し移住してみました!

甌島への移住を検討している方に島暮らしを体験してもらう「甌島トライアルステイ」を2022年10月に実施。多数の応募の中から選ばれた2組の方に来島いただき、5泊6日のお試し移住をしてもらいました。はじめての島暮らしでどんな気づきや出会いがあったのか。その様子をお届けします!

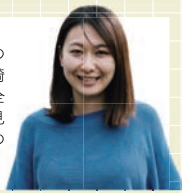
ふくい しん みひろ
福井 慎さん(29)・美宏さん(30)

ともに大阪府出身・在住。勤務先の鉄道会社で出会い2022年に入籍したばかりの新婚夫婦。これからの暮らしを考えるなかで移住先を探している。慎さんの両親が薩摩川内市出身のため鹿児島には愛着が。甌島は2人で旅したことがあり今回で3回目の来島。



しばた ゆうか
柴田 優香さん(25)

奈良県出身。東京都の不動産関係の会社で働く。高校の修学旅行で長崎県の離島を訪れたのをきっかけに、全国の島を巡るほどの島好きに。海が見えるところでの暮らしに憧れて島への移住を検討中。甌島は初来島。



life | 甌島の暮らし



福井さん夫婦は上甌島・里の空き家で島暮らしを体験。スーパーへ買い物に出かけたり、島の人に教わってキビナゴの手開きに初挑戦したり、甌島での暮らしのイメージを膨らませました。家は海から徒歩1分程のところ。海辺で朝ごはんを食べたり、夜は満天の星を眺めたり。島ならではの「海が近くにある暮らし」を満喫していました。



甌島といえば やっぱりキビナゴ



波の音をBGMにのんびり朝ごはん



海辺で夕日を眺めながら飲むビールが最高!

scenery | 甌島の風景

ゆったり散歩したり、ぼんやり景色を眺めているときに感じる甌島の魅力。賑わいのある観光地とは違う、穏やかな甌島の風景に惹き込まれていました。



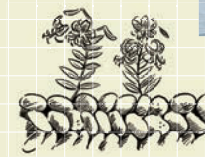
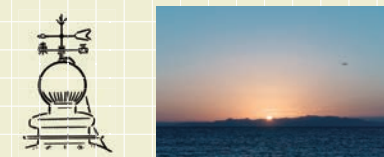
石垣の町並みが風情があるね



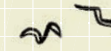
身近に季節を感じられるっていいな



なんでもない景色が落ち着く



自然とのんびりした気持ちになれるね



people | 甌島の人々

甌島出身者からはディープな島の話、移住者からは移住にまつわる本音を聞くことができました。



島の人気がさくに声をかけてくれるのがうれしい!



頼れる移住者の先輩がたくさん!



movie

甌島トライアルステイ
ダイジェスト動画公開中!

お試し移住中の様子をまとめた動画をYouTubeで公開しています。甌島についてもっと知りたい方は、ぜひQRコードからご覧ください。



お試し移住を終えて



福井さん夫婦

初対面の僕たちにここまでしてくれるのか!と驚くくらい島の方が温かく受け入れてくれて、弟・妹かのように面倒を見てくれました。甌島での仕事や子育てについて不安を感じていましたが、島の方と話すことで少し解消されました。移住に向けて動き出したいと思います!



柴田さん

レンタカーの予約がいっぱいだったと島の方に話したら「うちの車を使っていよ」と気軽に貸してくれたり、島の方の優しさ、温かさを感じました。島のいいところだけでなく、リアルな事情なども教えてもらえたおかげで、より深く移住について考えていくことができそうです。

移住の先輩に聞く

甌島での暮らし、どうですか？



上甌島・里

粘って出逢えた理想の住まい

かとう ゆうき あやか
加藤 優輝さん(31)・文香さん(28)

優輝さんは埼玉県出身。プロアスリートのメンタルコーチ。文香さんは薩摩川内市の本土出身。スポーツメンタルを学べるオンラインコミュニティでコミュニティマネージャーを務める。ともにほとんどの仕事を自宅からオンラインで行う。

2人が“いい状態”でいられる唯一の場所

加藤さん夫婦が埼玉県から甌島への移住を決めたのは2021年5月。「プロアスリートのメンタルに関わる仕事をしているので、相手の些細な変化に気づくために自分自身が“いい状態”でありたいと思ってきました。広告や騒音がない場所への移住を考えたときに島が候補に上がり、いろいろ行ってみた結果、甌島がいいなと(優輝さん)。「甌島が一番ほっとしたんです。その感覚が2人と一致したから、ここに決めました」(文香さん)。

空き家はあるのに、住める家がない

移住を決意した2人の前に立ちはだかったのは、住める家がないという現実でした。空き家はあるけれども、「お盆や正月に親族が帰ってくる」などの理由で貸せない・売れない家がほとんど。加えて島内に不動産会社がないので、仲介してくれる人を見つけるのも困難です。それでも諦められなかった加藤さん夫婦はSNSで甌島在住者に何度も連絡をとり、ついに1軒の空き家を紹介してもらうことに。すぐに見学に行きましたが、残念ながらあまりしっくりきませんでした。「島に来ることが目的ではなく、自分たちが“いい状態”であることが目的。だからGOサインが出せなかった」と、もう一度振り出しに戻ります。

そこからさらに粘り続け、2022年3月、新たな家を紹介されます。「元々住まれていた方が島を離れるということで、壊す予定だったところを島の人が見つないでくれました。見に来て、ひと目でいいと思える家でした」と即決で購入。2022年6月ようやく移住にこぎつけました。

大事なのは想いを伝え続けること

移住を決意してから家が見つかるまで10ヶ月。頑張れたのは支えてくれた島の人たちのおかげだと言います。「私たちが諦めなかったけど、島の人たちも諦めず、みんなで家を探してくれました。その姿勢が嬉しくて」(文香さん)。「とにかく島の人に『ここに住みたい』という想いを伝え続けました。あとはもうまかせて待つことしかできなかったけど、偶発的なことが重なって、巡り巡って今の家に出逢えたんだと思います。だから再現性はないかもしれないけれど、想いを伝えることが大事」(優輝さん)。

みんなで暮らす、安心感

移住後は、地域の人たちとの関わりを楽しみながら暮らしています。引っ越しの手伝いをしてくれたり、台風のときには様子を見に来てくれたり。時には勝手に玄関を開けて野菜や魚といったおすそ分けを持ってきてくれる人も。「みんなで暮らしている」という安心感が、2人を“いい状態”に導いているようです。



築50年の広々とした一軒家。居心地のいい縁側が2人の憩いの場。



庭には立派な柿の木が。実った柿はご近所さんにおすそ分け。



下甌島・手打

子どもと一緒に地に足をつけて暮らす

さわ みえ
澤 未恵さん(48)

埼玉県出身。アウトドアスポーツの大会の運営やライフスタイルショップでの仕事などを経て、2021年に神奈川県葉山町から小学2年生の娘と2人で移住。地域おこし協力隊として下甌島の地域資源を利用した商品開発に取り組む。

小さくシンプル、生活するための島

海に歩いて行ける場所。澤さんにとってそれが住まい選びの条件でした。美しい海が人気の神奈川県葉山町に暮らしていましたが、より良い環境を求めて島への移住を検討していました。

そんなとき一緒に働いていた友人が下甌島の手打地区へ移住し、遊びに行くことに。「第一印象を正直に言うと、移住先としては悩ましいなと思いました。『本当に何も無いんだ』と感じたから。だけど10日間友人の家で過ごして、生活を間近で見るとリアルな暮らしのイメージができたんです。これまで仕事で訪れた奄美や宮古島も魅力的だったけど、旅行や観光のイメージが強く、私は浮足立っちゃって。ここは何もない分、自分たちの生活が落ち着いてできるのかなと」。

澤さんが移住にあたり重要視したのが子育ての環境。「実は最後まで奄美と迷ったんです。でも奄美だと学校も大きくなるし、世界も広がる。なるべく小さくシンプルに、必要なものだけある場所の方が、娘にも私にもいいと思ったんです」。折よく手打地区に児童クラブができたり、診療所に新しい先生がやってきたり、環境が整ったことも決め手となりました。澤さん自身は地域おこし協力隊としての採用が決まり、2021年9月に移住。「今までで一番海に近い」という理想の場所での暮らしがはじまりました。

子どもを変えた島の環境

移住当初、手打小学校は全校生徒23人。神奈川で通っていた小学校と比べて1クラスの人数は約1/5になりました。「それがいいことなのか悪いことなのか、移住してきた時点でも悩んでいました。ほとんど賭けに近かったです。ダメだったらまた引っ越さないといけなと思っていくらい」。

しかしその賭けは予想外にいい方向へ。恥ずかしがり屋で大人数の中にいると圧倒されがちだった娘さんが、甌島の環境

中で少しずつ変わっていきます。「たまたま本人に環境が合っていたんだと思います。前に出ていくようになりました。例えば朝学校に行くときに近所の人に挨拶をするとか、前はできなかった。最近は私が知らない人にも挨拶しているんです」と、目に見える成長に顔をほころばせます。

“島立ち”が親子の次なる目標に

甌島には高校がないため、中学を卒業した子どもたちは島の親元を離れ本土の高校に進学する“島立ち”を経験します。「最初はそんな絶対無理!と思ってました。でも島立ちした子が帰ってきた姿を見て、思ったより悪くないなと。子どもがすぐ自立しているなと思ったんです。ここのいいところって、船で1時間で本土から帰ってこれる。1年、2年会えないわけではないから」。

同じく最初は嫌がっていた娘さんも、今では島立ちを取材したテレビ番組を熱心に見ていたり、前向きに受け止める姿が見られるそう。「今は親子にとっての成長の機会と捉えています。都会にいたら絶対になかったことだから新鮮だし、親御さんに対してもお子さんに対してもすごいなと感銘を受けています。まだできるかわからないけれど、できたらいいなという2人の次の目標になっています」。



初来島時に澤さんが一目惚れしたという、芝生の校庭が広がる手打小学校。



娘さんも海が大好き。海辺の散歩やシュノーケリングが親子の大事な時間。



上甕島・里

働くなかで感じる 手触りのあるやりがい

こが なるみ
古賀 愛深さん(25)

福岡県出身。ゲストハウス「FUJIYA HOSTEL」マネージャー。大学2年生のときに初めて訪れた甕島に魅了され、短期移住体験企画をきっかけに甕島で就職。いつか自分の宿を開くのが夢。

3ヶ月限定のつもりが、3年目の島暮らし

古賀さんが甕島へやって来たのは、まだ大学3年生のときでした。甕島で飲食店やゲストハウスなどを運営する「東シナ海の小さな島ブランド株式会社」が募集した3ヶ月限定の移住体験企画がきっかけ。春休みの間だけ同社のゲストハウス「FUJIYA HOSTEL」に住み込みで働きながらお試し移住をしてみようと、2020年1月に来島します。

しかしその後すぐにコロナ禍へ。大学の講義がオンラインで受けられるようになったことから、そのまま4年生の1年間も甕島で過ごすことに。昼間は学生、夜は宿で働くという生活を続けます。大学卒業後は同社の正社員に。気づけば甕島での暮らしは3年目を迎え、FUJIYA HOSTELのマネージャーとして日々、来島者をもてなしています。「何度も来てくれる方がいらっしゃったり、目の前のお客さんの喜ぶ顔が嬉しくて。手触りのあるやりがいがあったから、続けてこれたのかもしれません」と、甕島で働き続けることにした理由を振り返ります。

小さな島ならではの関係性

甕島に来て驚いたのが、人々の距離感の近さ。「スーパーでもガソリンスタンドでも、日常生活で会う人がみんな私のことを認識していて、『元気してる?』『ちゃんと食べてる?』って声をかけてくれるんです。自分だけじゃなくて、宿のお客さんにもそう。お客さんが海辺でバケツを運ぶのに苦労していたおばあちゃんを助けてあげたら、その夜おばあちゃんがお礼にバケツいっぱいのお魚をもってやって来て、『助けてくれたアベックはここに泊まっているんでしょ?』って(笑)。そんな島ならではの顔が見える関係性がいっていいなと思います。

距離感が近いコミュニティの場合、入っていくまでが苦労しそ

うですが、古賀さんの場合は先に仕事が決まった上で移住してきたためスムーズでした。「最初からどこに行っても“賢太(社長)のところの子”って言われて、すんなり受け入れてもらえました。仕事関係じゃなくても、先に頼れる人をつくってから移住すると馴染みやすいと思います。とくに私の場合は単身だったから、困ったときにすぐ頼れる人たちがいたのは心強かったです」。

生きる力が試される場所

現在、古賀さんは宿の仕事と並行して、甕島の魅力を発信するフリーペーパーの制作を行っています。「自分が惹かれた甕島の良さをもっとたくさんの人に伝えていきたい」と、今後の展望を語ります。「甕島は生きる力が試される場所だと思います。ないものはたくさんあるけれど、自分でつくろうと思えば何でもできる。季節のものを使って器用に料理するような、暮らしに根づいた知恵みたいなものが脈々と受け継がれていて。そういうものをもっと知りたいです」。

甕島にやって来た大学生のときには、魚を捌くのもおっかなびっくりだったという古賀さん。島の人に習いながら少しずつ覚え、今では宿の夕飯に自分で捌いた魚を出すように。甕島で着々と生きる力を蓄えています。



古賀さんとおしゃべりを楽しみに宿を再訪する人も多く、すっかり甕島の顔に。



古賀さんが編集・デザインを手がけるフリーペーパー「KOSHIKI ZINE」。

就労情報はP16へ

甕島のここが好き!

何もない、だからこそ暮らしやすい

「甕島の魅力は、一度の来島ではなかなか伝わらないかもしれません。暮らしてこそいい島。何もないからこそ、シンプルに落ち着いて暮らせる気がします」



「夜も眩しい明かりがついて、常に情報が流れている状態から離れられるところに甕島の良さがあると思います。ただ日没を眺めながらビールを飲む。それだけのことが贅沢に感じます」

「休みの日は特別な何かをやるより、身近にある自然を感じに行くことが多いです。幸せのハードルが下がって、自分たちにとっての本当の幸せに気づけるようになりました」



素朴だけど美しい日常の風景



「観光地の絶景を見たときに感じる『うわ、すごいな』という感覚と、甕島の景色を見て感じる『いいな』という感覚は違うと思うんです。絶景は心のなからドバツと出る感じ、甕島はぼこぼこ湧いてくる感じ。ずっといるなら後者の方がいいなと」

「朝起きて窓から空をのぞいたら『今日めっちゃ燃えそう!』ってすぐに海に出て行って朝焼けをみて『ふう』ってできる。自然の中に私たちがいさせてもらっている感覚を味わえます」



「海辺でぼーっと空を眺める時間が幸せです。一秒一秒、空の色が変わっていくなんて、本土にいるときは気にしたことなかった。こんなに“今ここにしかない光景”ってあるんだなっていうのが、衝撃でした」

海が身近にある暮らし

「家から釣り場まで数分で行けます。とくにイカ釣りが最高! 鮮度がいい分、とにかく魚が美味しいです」



「仕事が終わって、そのまま汗だくですぐ近くの海に飛び込んでぶかぶか浮かぶのが夏の日常です」

知らない人同士でも挨拶

「車同士でもすれ違うときには頭を下げたり、知らない人でもみんな必ず挨拶することに驚きました。ちょっとした声かけが心地いいなと思います」



movie



移住の先輩に聞く
インタビュー動画公開中!

先輩移住者へのインタビューの様子をまとめた動画をYouTubeで公開しています。本誌では紹介できなかった、より詳しい内容もあり! ぜひQRコードからご覧ください。

